

【資料紹介】

菊川市赤土政所遺跡出土の土鈴について

中川 律子

要旨 静岡県中部、菊川市南部中央の旧小笠町赤土地区に所在する赤土政所遺跡は、丹野川によって形成された沖積平野に位置し、川の南側一帯に広がっている。遺跡周辺には弥生時代中期の標識遺跡でもある嶺田遺跡をはじめ、多くの遺跡が所在する地域でもある。遺跡では4面の遺構面が見つかり、このうち第3面では古墳時代中期から終末期までの竪穴建物跡や溝、土坑、自然流路が見つかり、その遺構面を覆う包含層から土製の鈴が出土した。第3面の竪穴建物跡の覆土内土器から、土鈴は5世紀代（古墳時代中期）と捉えられる。発掘調査報告書では記述しきれなかった出土位置や資料の観察により、土鈴の年代や構造等について検証する。

キーワード：菊川市、赤土政所遺跡、丹野川、古墳時代中期、竪穴建物跡、土鈴、包含層、土坑、土師器

1 はじめに

菊川市赤土政所（あかつちまんどころ）遺跡は、北側に位置する一反田遺跡とともに、当センターの前身である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成19年度から断続的に確認調査と本発掘調査を実施してきた集落・生産遺跡である。本発掘調査は平成24年度末に終了し、平成27年度までに資料整理・報告書刊行を完了している。この遺跡の調査は（主）掛川浜岡線原子力発電所関連道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として始まり、6,400㎡を超える面積の発掘調査を実施した。遺跡の年代は、弥生時代後期～古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世で、4面の遺構面とそれに伴う遺物が見つかり、

このうち第3面ではほぼ全域で遺構を検出した。なかでも2-1区では集落域が見つかり、調査区北半部では竪穴建物跡や土坑、溝跡、不明遺構などが集中している。竪穴建物跡からは土師器の一括資料も出土している。

本稿の目的は、発掘調査報告書をまとめる際に、時間的な制約のために詳細をまとめきれなかった資料についての再検証を行い、研究資料として活用できるようにすることである。筆者はこうした資料の再検証を第一と考え、赤土政所遺跡の第3面を覆う包含層より出土した土製の鈴についての資料紹介をする。土製の鈴は古墳時代中期に属すると思われるものだが、本資料が出土した位置や、形状の詳細と共に、類似例等にも触れて検証する。



図1 菊川市赤土政所遺跡の位置図



写真1 赤土政所遺跡遠景（南東より）

2 遺跡の概要

まず赤土政所遺跡は菊川市域の南部（旧小笠町）に位置する弥生時代～近世までの集落・生産遺跡である。遺跡の北側には一反田遺跡が所在し、さらに北側には丹野川が東から西へ流れる。菊川市赤土地区は、この丹野川の中流域にあたる。丹野川は菊川の支流である牛湊川の支流で、遺跡はこの丹野川と江川に挟まれた沖積地内の低地部に位置する。遺跡調査前の当地は集落と水田が広がっていた。調査原因が道路整備事業であることから調査区は南北に長く（図2）、南側より1区から5区までの設定となった。このうち南半部の1区から3-1区までが赤土政所遺跡である。調査の結果、遺構面は4面確認され、微高地には竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの集落遺構、低湿地には水田跡が見つかった。このうち第3面では竪穴建物跡が3軒と土坑19基、不明遺構1箇所を検出し、遺構の大半が2-1区北半部にまとまっていた。出土遺物は竪穴建物跡や土坑覆土より土師器を中心とした土器がある。

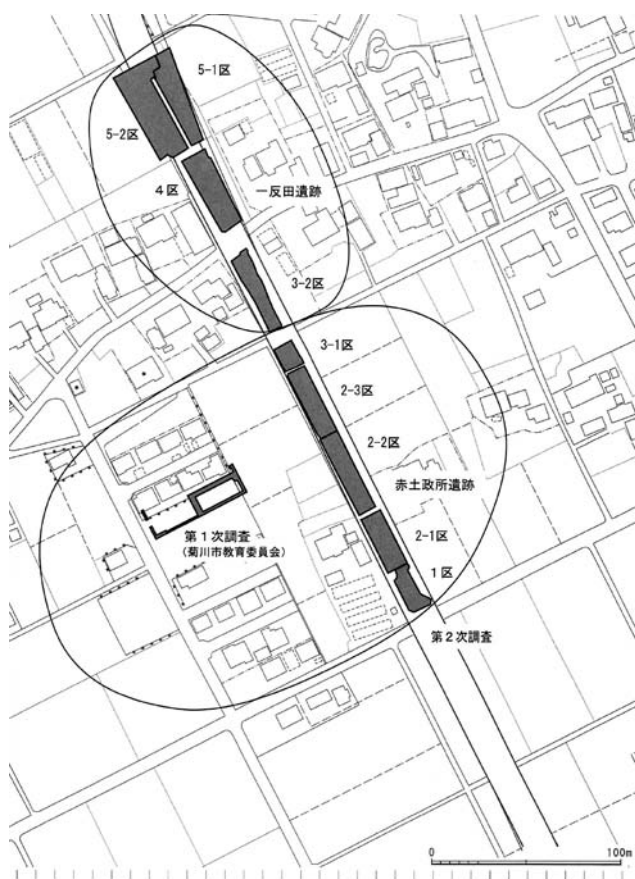


図2 赤土政所遺跡・一反田遺跡の調査区

3 「土鈴」について

(1) 出土状況

土鈴は平成21年1月に赤土政所遺跡の2-1区北半部、第3遺構面を検出する作業中に出土したことが遺物台帳の記録に残っている。この2-1区北半部では、その後の調査で竪穴建物跡3軒（SH301～303）が見つかった（図3）。竪穴建物跡はいずれも隅丸方形の周溝を持ち、竪穴建物SH301で言えば周溝内部に3か所の支柱穴が確認されている。調査時の設定グリッドでは、O-25～27、P-25・26付近である。竪穴建物跡のほかに同区では土坑や溝、不明遺構等が検出されている。調査報告書でも触れているとおり、竪穴建物跡の覆土内より出土した土器は、須恵器を伴わず土師器のみである。土師器は古墳時代中期の一括資料で、壺、甕、高坏がある（写真3・4）。これらの土師器は支柱穴の内側よりまとまって出土した。竪穴建物跡以外の土坑より出土した土器も古墳時代中期から後期の土器であり、古代以降の時期へ下ることはない。よっ

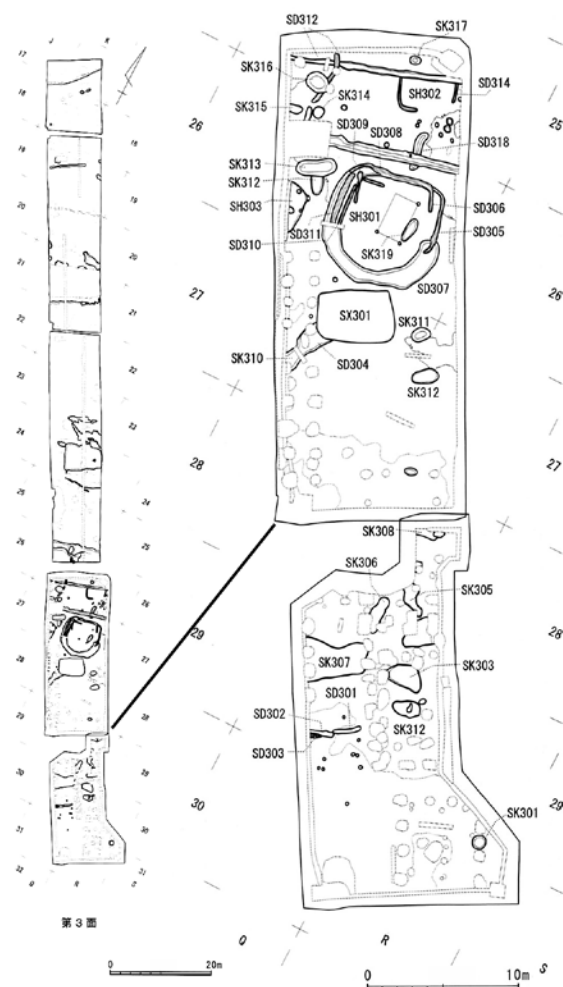


図3 赤土政所遺跡1区、2-1区遺構配置図

て、この遺構面を被覆する包含層より出土した土鈴も古墳時代中期または後期までの時期に属すると捉えられる。

(2) 形状

発掘調査報告書では土鈴（第40図178）について「178・179は用途不明の土製品である。178は把手状の形状をもつ製品であるが、内面にもハケ調整がされていることから甌の把手ではない。径3cm程の棒状に手握ね整形されているが、一部にはハケ目もある。中央には工具による両側から開けられた貫通孔がある。『土鈴』のような中空の製品であったとも考えられる。」と記載されている。また、報告書刊行時点では土器なのか、土製品なのかの判断がつかず、遺物観察表では土器に含まれている（註1）。

本稿ではさらに詳細に形状を観察してみる。土鈴は全長6.8cm、最大幅は3.0cm、軸部の長さは5.2cm、幅は3.4cmである。下方部の厚さは0.4cm程ある。装着部分はやや厚く0.6cmである。貫通孔は最大径が1.6cmで、表側と裏側から工具のようなものを使って穿たれている。

まず軸部であるが、表面には指によるナデ押さへの圧痕がある。ハケによる調整痕は少なく、下方に縦方向のハケ目が数か所ある。軸部は手握ねにより、径3cm

程の棒状に伸ばしている。そのため前後左右は非対称になっている。また頭部に向かってわずかに径が細くなる。頭部先端はやはり手指により押さえられ、平坦面を作り出している。必ずしも丁寧な整形とは言えず、むしろ不整形と言ったほうが良いかもしれない。前述したように軸部中央には、貫通した孔がある。孔は径1.6cmで、両側穿孔されており、孔の形状はすり鉢状を呈する。

ここで仮に本資料が甌の把手だとしたら、①穿孔は構造上、強度が落ちるため必要なものではない。

次に下方部であるが、下部分は欠損している。元の形状は明らかではないものの、裾は下方へ広がるような曲線があり、外形は膨らみを持った形であったことを連想させる。さらに下方向から見ると、内面奥は窪んでいてハケ目が円形に廻り、調整された痕が残っている。これはすなわち下方部が中空もしくは裾にひろがった高坏の脚部のような形状だったと仮定できる。

一方、甌の把手は本体から剥がれた状態で見つかる場合が多い。このとき剥がれた部分は本体の曲線面と同じような面になるか、または本体へ埋め込むような突起が出ている場合もある。つまり②甌の把手には内面にハケ調整した痕跡は見られないが、本資料にはハケ状工具で面調整した痕跡がある。

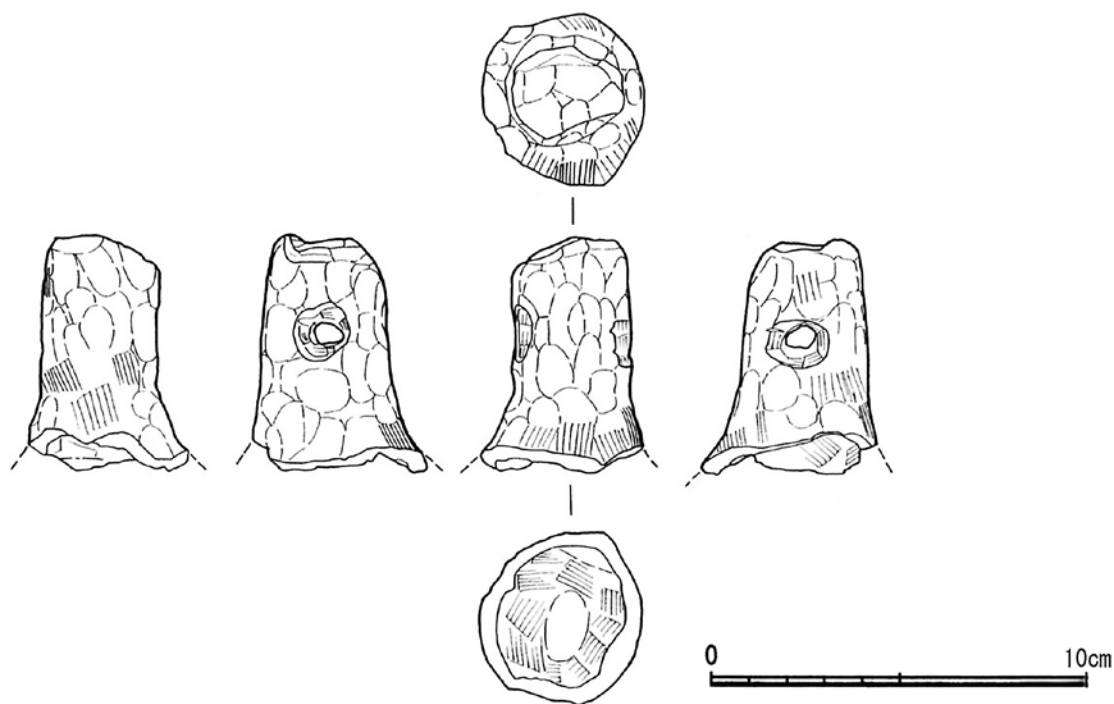


図4 赤土政所遺跡出土土鈴実測図

(3) 胎土

内・外面とも胎土の色調は標準土色で灰白10YR8/2である。胎土は精製された粘土を用いているが、微かな白色粒子が含まれている。

同じ包含層より出土した土師器と比較して、胎土は白みが強い。

(4) 類例

時間的な制約もあり、類例については詳しく調べられてはいない。静岡県内では当センターの前身である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査した掛川市領家遺跡で自然流路跡の中層より土鈴が1点出土している。流路中層では古墳時代後半期の遺物を多く含んでいる。土鈴は土師質で、丸みを持った山形の不製球形である。上部は指で摘み出して紐（つまみ）を作り、径0.7cmの孔が開けられている。同層からはこれの丸（がん）と思われる径1.5cmほどの土師質の小玉が見つかった。同一層に共伴する土器から、土鈴は古墳時代後期と位置付けられている。発掘調査報告書では、刊行時点で県内の土鈴出土例は他にないとされている。

一方、国内の出土例は国生尚氏により集成されている（国生1992）。国生氏によれば、古墳時代～平安時

代までの土鈴は99例ほどである。古墳時代以降の土鈴は、基本的に金属製の鈴を模倣しているものである。ゆえに上部に紐（つまみ）と言われる部分を作り出して孔をあける。器体は円形または算盤玉状の中空になっており、孔または「鈴口」と言われるスリットが開けられているのが一般的な形状の特徴である。しかし、山田光洋氏による古墳時代から平安時代の土鈴集成図を見ても、その形状はさまざまで、忠実に金属製の鈴をまねたとは言えないものも存在する（山田1998）。金属製の鈴の模倣と言えども、形状は各々個性があり、そのなかで赤土政所遺跡の土鈴を類似比較するのも難しい。その後、資料も若干は増えているはずだが、土鈴の研究論文は少なく、その後の調査を要することが今後の課題でもある。

(5) 年代

土鈴は国内では縄文時代と古墳時代以降の出土例がある。弥生時代の出土例はこれまでにないと言われている（笠原2001）。赤土政所遺跡の土鈴の年代は、3（1）の出土状況でも触れたとおり、須恵器を伴わない竪穴住居跡を覆う包含層より出土していることから、古墳時代中期に属することは間違いないであろう。



写真2 赤土政所遺跡2-1区第3面完掘状況



写真3 竪穴建物跡SH301出土土器



写真4 竪穴建物跡SH302出土土器



写真5 土鈴正面



写真6 土鈴裏面



写真7 土鈴側面1



写真8 土鈴側面2



写真9 土鈴頂部



写真10 土鈴穿孔部分

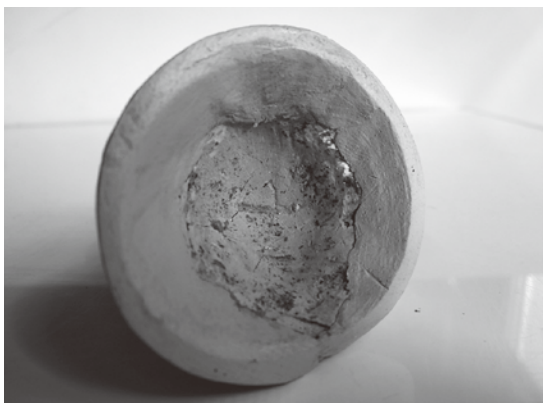


写真11 土鈴内面



写真12 土鈴ハケ目

(6) 制作技法

今回は本資料と甗の把手との相違点を挙げてきた。

- ① 穿孔は構造上、強度が落ちるため必要なものではない。
- ② 甗の把手には内面にハケ調整した痕跡は見られないが、本資料にはハケ状工具で面調整した痕跡がある。

本資料は、①・②の理由により甗の把手ではないと考えられる。では、はたして土鈴なのだろうかという疑問も一方では残る。そこで、土鈴の制作技法にも着目してみることにする。

土鈴には成形の技法に2種類がある(国生1992)。ひとつは上下を別に作り、後で丸を入れてから接合する方法、もうひとつは底部から作って紐のほうへ絞ってから上部で紐をつけて一体に成形する方法とがある。

本資料は上下を別に作る方法と思われる。それは紐の下、内面側にハケ調整痕があること、紐の根元には他所よりも数多く縦方向のハケ目が入っている。これは紐部分と器体とを後で接合させた痕跡ではないだろうか。下方部が欠損しているため、これ以上の制作技法は推測の域を出ないことから、再検証が必要であろう。

4 おわりに

静岡県内で出土した古墳時代の土鈴は、本当に数少ないのが現状である。しかしそれは静岡県に限らず、全国的に見ても大きな差はなく、同じく数少ない傾向がある。それが土鈴研究の進まない一つの原因でもある。

今回紹介した土鈴は、ともすれば不明土製品として埋もれてしまう可能性もあった。ただ、こうした資料紹介により、国内の類例と比較検討される資料として活用されることになればと願うものである。本稿で十分な検証が出来たわけではないが、今後、土鈴の出土例の増加を期待して、古墳時代以降に出土する土鈴の用途・役割についての検証ができればと考える。

註

- 1 本文は『赤土政所遺跡・一反田遺跡』(第1分冊)第4章、遺物観察表は同書(第2分冊)の巻末にある。

引用・参考文献

新版『標準土色帖』 1988年版 農林水産技術会議事務局
監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修
国生尚 1992 「土鈴集成」『岩手考古学』 岩手考古学会

山田光洋 1998 『楽器の考古学』 同成社
長谷川睦 2001 『領家遺跡Ⅱ・梅橋北遺跡』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
笠原 潔 2004 『埋もれた楽器』 春秋社
静岡県埋蔵文化財センター 2016 『赤土政所遺跡・一反田遺跡』(第1分冊) 静岡県埋蔵文化財センター